令和三年七月

漢詩鑑賞

【通釈】起句　真夏の酷暑のもとで門を閉ざし、僧衣をはおり座禅を組ん

　　　　　　　でおられる。

　　　　承句　僧院の部屋や廊下に蔭を作り、暑さを防いでくれる松も竹

　　　　　　　も無い。

　　　　転句　名僧が心身を安らかにしてに入るには、必ずしも深山

　　　　　　　や渓谷を必要としない。

　　　　結句　心中の雑念を消し去って、の境地に達すれば火の中にあ

　　　　　　　ってもおのずと涼しいのだ。

【語釈】　題　　　詩を書きしるすこと。

　　　　　悟空上人

　　　　　　　　　人物不詳。初唐に玄奘に隨って印度に渡り歸って多く

　　　　　　　　　の経典を訳した同名の高僧が居たが、別人と思われる。

　　　　　院　　　僧院、寺。

　　　　　三伏　　夏の暑さのきびしい期間をいう。

　　　　　　　　　夏の土用を初伏、中伏、末伏の三期に分けた称。伏と

　　　　　　　　　は火気(陽の気)を恐れて金気(陰の気)が伏蔵するという

　　　　　　　　　意。

　　　　　衲　　　僧衣。

　　　　　兼　　　ともに。二つながら。

　　　　　房廊　　僧院のへやと廊下。

　　　　　安禪　　心身を安らかにしてに入ること。

　　　　　　　　　禅定とは、座禅で俗情を断ち精神を統一し心を静めて

　　　　　　　　　三昧の寂境に入ること。

【押韻】　平声、陽韻。廊、涼。起句は踏み落とし。

【解説】　杜荀鶴（八四六－九〇四）は末唐の詩人。大順二年（八九一）進士及第したが、世の混乱を避けて郷里池州（安徽省）の九華山に隠棲した。後、朱全忠に重んぜられ、主客員外郎、知制誥に至った。若くして詩名を馳せた風流人であった。

　　　　　この詩は恐らくは隠棲時代の作で、或いは作者自身参禅したのかも知れない。

　　　　　禅の境地を詠じたこの詩の転句と結句は後世禅のとなった。

　　　　　我が国では、天正一〇年（一五八二）織田信長が甲斐の国で武田勝頼を討った時、焼き討ちされた武田家ゆかりのの快川和尚が火の中で平然と唱えたという「滅却心頭火亦涼」（心頭を滅却すれば火も亦涼し）となって広く知られる偈となりました。

以上